

下野市立吉田西小学校

1 学校課題

「学ぶ楽しさを実感し、自ら学ぶ児童の育成」
～言語力を高める指導法の工夫改善を目指して～

2 研究計画

(1) 課題設定理由

本校では、数年前から、コミュニケーション力を育成するために、自分の思いを言葉にして伝え合うための取組を続けてきた。昨年度までの取組で、発表したり書いたりして表現することには一定の成果が見られるようになった。また、昨年度は読みのアセスメントを実施し、一人一人の特性や個性に応じた支援の方法についての研究にも取り組んできた。しかし、自分の思いをより適切に表現するためには語彙力が十分とはいえないこと、書かれている文章が正しく読み取れない児童が多いことが課題となっている。

また、昨年度学力向上プロジェクト事業の対象校となり、全国学力学習状況調査、とちぎっ子学習状況調査の検査結果について達成度の検証や、質問紙調査の分析から、本校の児童は基礎的・基本的な事項をその場で理解しても、定着するまでの反復学習が不十分であることが明らかになった。また、文章を読んで意味することや伝えたいことを理解した上で思考・表現することにも課題がみられた。

そこで、本年度は、読み書きの基礎となる言語力の向上に重点を置いて研究を進めていきたいと考えた。特に、文章に即して読むためには、言葉の意味やつながりを理解した確かな読みの力をつけることが必要であると思ひ、さらに、自分の思いを豊かな言葉で表現できるよう語彙力を身に付けさせたい。

言語力とは、知識と経験、感性・情緒等を基盤として、自らの考えを深め、他者とのコミュニケーションを行うために言語を運用するのに必要な能力を意味している。言語力は、国語科を中核として全教科で伸ばしていく力である。その中核となる国語科の指導に立ち返って、基礎・基本を明確にして指導していきたいと考える。昨年度も実施した読みのアセスメントを活用し、個別の支援の手立てについても工夫していきたい。

また、言語は学習を行うための手段でもあるので、言語力が高まることで学習への意欲も向上し、更に学力の向上につながっていくと考えて研究を進めていくものとする。

(2) 研究の仮説

- ・国語科の基礎・基本を明確に捉え、語彙力を高めるための指導法を工夫改善していくことで、確かな読みの力が身に付き、言語力が育つのではないかと。
- ・どの子にも分かる授業を展開し、個に対応した支援をしていくことで、学ぶ楽しさを実感し自ら学ぶ意欲につながるのではないかと。

(3) めざす児童像

- ・確かな読みの力を身に付け、学ぶことの楽しさを感じている子
- ・語彙が豊かで、考えを分かりやすく伝え合える子



3 研究内容

(1) 研究授業を通しての課題への取組

期日	学年	単元名	授業の視点
6 / 15	1年	くちばし 「くちばし」	<ul style="list-style-type: none"> ・1文ずつに分けた文カードを用い、3事例を一覧にまとめられるようにしたことは、事例の順序や文章の構成を自力解決するために有効であったか。 ・くちばしの形や特徴をワークシートにまとめたり確認タイムで話し合ったりすることは、文章の内容の読み取る上で役に立ったか。
7 / 6	5年	詩を味わおう 「からたちの花」	<ul style="list-style-type: none"> ・からたちのイメージについて共有することと、詩に出てくる人物について考えるという2つの学習活動に焦点化して考えたことは、詩の情景を想像するのに適切であったか。 ・どの部分をどう読むかについて、読み方とその根拠をペアの相手に伝えて読むようにしたことは、一人一人が自分の読みのめあてを考える上で有効であったか。
9 / 30	2年	音読劇をしよう 「お手紙」	<ul style="list-style-type: none"> ・読み取ったことを音読の工夫に生かしていたか。 ・振り返りを書く活動(本時のまとめを書く)において、書き方(型)を示したことは、言語力を高めるための手立てになっていたか。
10 / 27	4年	アップとルーズで伝える 「アップとルーズで伝える」	<ul style="list-style-type: none"> ・くり返し使われる言葉に着目させたことは、段落⑦⑧の役割を考えていくために有効であったか。 ・段落⑦がある意味について考えたことは、主体的に文章を読むために有効であったか。
11 / 2	3年	せつめいのくふうについて話し合おう 「すがたをかえる大豆」	<ul style="list-style-type: none"> ・「中」の段落を整理した表は、こどもたちにとってわかりやすいものであったか。 ・本時の課題に迫るために、段落⑦を省き、段落③～⑥について考えたことは有効であったか。
12 / 14	6年	伝統文化を楽しもう 「狂言 柿山伏」	<ul style="list-style-type: none"> ・根拠をはっきりさせて、音読の工夫の仕方を考えさせたことは、親しみをもっておもしろさや場面の様子が伝わるような音読をさせる上で有効であったか。 ・おもしろさが伝わるような音読の工夫の仕方を、全体で考えてから一人一人考えさせたことは、学校課題の「自ら学ぶ児童の育成」に迫る上で有効であったか。

(2) 「基礎的・基本的な知識・技能系統表」の作成と活用

国語の「読むこと」の単元に関して、習得させる知識・技能を明確にし、学年間の系統性が分かるような表を作成した。授業後には、習得させるための手立てと振り返り・改善策を記録していくようにした。また、各学年で押さえるべき言葉も記入し、どの学年でどの言葉を学習するのかを明示し指導に生かせるようにした。

(3) 「まなびタイム」の時間の設置

日課を見直し、5校時の前に10分間の「まなびタイム」を設けた。言語力育成を中心とした基礎学力の充実を図れるよう、視写や言葉のきまりなど言語の基礎となる学習をする時間とした。毎日の10分間を積み重ねることで、集中して学習する姿勢を身に付け5校時の授業への移行がスムーズになることで、学習への意欲の向上にもつながるようにした。

(4) ICTの活用

興味・関心をもち学ぶ楽しさを感じて学習に取り組めるよう、デジタル教科書やタブレット端末、実物投影機等の活用を図った。学習に苦手意識をもつ児童にも、主体的に学ぶ楽しさを感じ取ることができるよう、視覚・聴覚に訴える教材教具の工夫をした。

4 本年度の成果と課題

- ・ペアやグループでの学び合いができるようになってきているので、さらにそれを一人一人に生かせる授業の展開を工夫できると、学ぶ楽しさをより実感できるようになると思われる。
- ・ICTの活用により、難しい課題や初めてのことに対しても意欲の高まりがみられるようになった。また、授業での学習意欲の高まりが、家庭学習(自主学習)にも生かされつつある。
- ・言語力の高まりの程度を確かめることが不十分だったので、言語力のレベルを明確にできるような検定など具体的なめあてとなるものを取り入れるなど、児童自身にも知識や技能の向上がわかるような方法を検討していきたい。
- ・授業では、各単元の指導事項を精選し、指導内容をより焦点化・重点化していくことが必要である。また、学校での学習が家庭での学習につながるような連携となるよう、家庭への啓発の仕方を工夫していきたい。